

パネルディスカッション

「地域における知の基盤づくり
～これからの公共図書館の可能性～」

パネリスト 山崎博樹 平出広志

田山健二 中村佳史

佐藤正実 湯浅俊彦

コーディネーター 平賀研也

平賀

今回は「地域・デジタル・これからの図書館」この三つのキーワードで考えようということを進めてきた。フリーディスカッションを始める前に、研修に参加された皆さんに「図書館とは何ですか」「何を・誰に・何のために・誰が」やっているのが図書館かという議論をしていただきたい。その結果を踏まえて先生方とご議論をしましょう。



研修参加者（男性）

図書館は様々な資料を扱うが、資料そのものの自体の価値だけでなく、そこに付加価値をつけていく、価値を見出す、人と人をつなぐ、橋渡しをすることが図書館であり、図書館の役割であり、図書館で働くものの役割であると考えます。

研修参加者（女性）

図書館は社会教育施設というカテゴリとして考えている。人の主体性を発揮できる、社会をつなぐことのできる、また個人の生活の資質向上を手助けするところだと思っている。最終的には人とつながることの手助けになり、自殺が減るとか世界平和につながっていけばいいと思う。

研修参加者（女性）

図書館は、もしなかったらどうなのか、なくても困らないという意見もある。しかし、図書館に人が集まって、意見が集まることはコミュニティの和（輪）になる。そこから人がつながって、連携や思いの共有ができる。

湯浅

究極は図書館とか教師は無くなる方がいい、つまり利用者が主体的にやれたら、それにこしたことはない。図書館を使って調べたことを、図書館員の介助なしにできたら、最高に幸せなこと。でも本当のところ、情報量が増えれば増えるほど必要になってくる。デジタルネットワーク社会の中で、むしろ図書館員が必要になる。図書館の持つ共有するとか、コミュニティとかはすごいもの。逆説的に考えたら、無くなってからその凄さに気付くのではないかな。

山崎

自動化が進むと図書館員の役割が減っていき、図書館員とは何かということになる。でもやはり必要なんだということを示すためにも、自分は何をすべきかということ。図書館は民主主義を支える場だと思うが、そのために何をするかを考えていかないとだめ。今のままでは実現できない。

平賀

図書館は情報と人をつなげる、情報を組織化する、情報と情報をつなげる、人と人をつなげるそういう場所だと思う。情報連想検索、グーグル検索と図書館についてはどうか。

中村

図書館に期待したいのは情報の見せ方のレパートリーの豊富さ、情報へのたどり着き方の豊富さ。検索キーワードでグーグルレファレンスすることと、本をはじから調べて答えを探していくことは、同じ検索をしていることと勘違いしがちであるが、全く違う。図書館に来て図書館員と話をする中で、いろんな視点に気付かされる、図書館はそういう空間であってほしい。

平賀

レファレンスサービスは答えを教えることではない。正解はない。自分が思ったことと違った視点やそこにたどり着く力を付けてあげることが大事。

平出

図書館に来て4年目になる。司書は黙々とすごく働いているが、それが外に出てこないのが残念。一生懸命やっているが、カウンターしか見えない世界なのかなとも感じている。

是非、私の図書館ではこういうことをやっているという発信をしてほしい。地域に応じた発信をしてほしい。

佐藤

収集と保存、活用ということでは、収集はアーカイブも図書館もやっている。その先の編集と活用はどうなのか。アーカイブの分野では比較的収集に力を入れているが、活用する側からすればそんなに数はなくてもいい。点数ではなく活用の仕方が重要。図書館はよく「屋根のついた広場」と言われるが、その活動拠点で誰がどのような編集をして活用まで持っていくのか、というところまで見えてくると面白いと思う。

平賀

話しているうちに、本、情報、資料、アーカイブという言葉の境界がなくなってきたようにも感じた。今日ここで語られたアーカイブは図書館に収蔵されているものと置き換えて考えてもいい。

古文書と図書館についてはどうか。博物館の仕事ではないのか。

田山

機関によっては発信したがないことがある。大事なものだから出してはいけません。とか、研究がまだなされてませんか。出した方が研究になるでしょう。というようなことがある。

3年前にこの事業を始めたのは、古いものだけでも新しいサービスになるだろう。古くて新しい、これこそがこれからの図書館の生きる道のひとつだろうと思った。

図書館が持っているものいないもの、他が持っているものそれをつなげて発信して

いくこと、それが図書館の司書の特性だと思う。学芸員には比較的その意識は少ない。浜松の図書館が良い事例である。図書館発のML連携になりつつある。



平賀

図書館こそ地域の情報を束ねるのに最も相応しい場所だと思う。それはなぜか。ご意見ありますか。

山崎

秋田県では今7館でデータをいれていただいている。どちらかというと、学芸員は研究がしたい。展示は見に来てほしい。そこで終わっている。図書館員は情報を伝えることに意識がある。本の貸出しをしているから、情報を提供することに違和感がない。数千万のお金をかけて図書館でやろうというからには図書館でやる理由が必要。その時に、図書館が情報をナビゲートする力を持っているということを説明した。

平賀

図書館は情報を集めて公開するという使命を持った組織。その中で、今日我々はデジタルをテーマにしてきたが、図書館でやってきたことがデジタルに変わったことで本質的に何か変わったのか。道具が変わっただけなのか。その点はどうか。

田山

今まで見せられなかったものが見せられることが決定的な違い。

時間も問わず、いつでも世界中の人が見られるということは凄いこと。デジタルでなければならない。

山崎

見せられなかったものが見せられる。これは当然のことで、むしろ、他のものと組み合わせで見せられる。本は組み合わせさせてみせるのがむずかしい。

たとえば、解体新書の関連資料は美術館にも図書館にもある。それが、同時にデジタルで出てきて、一緒に見られる。見せ方によって考え方、とらえ方も変わってくる。今までできなかったことができる。



湯浅

公共図書館でデジタル化された資料をあまり扱ってないところは、何から手を付けたらいいのか分からない。例えば、「東寺百合文書」（京都府立総合資料館）がデジタル化されたことによって、図書館でも、様々な地域にまたがって文書に書かれたいろいろな事例を紹介できるようになった。

兵庫県立図書館の雇用対策事業のスキヤンニング事業もそうである。埋もれていた地域資料が成果物として検索され使われるようになった。まさに、グーグル的世界観。これがまさにデジタル化の効用。

一方、電子書籍を入れた図書館の例として、大阪市立中央図書館がある。先日、図書館前で待ち合わせをして高校生を連れて行った。電子書籍の EBSCO eBook

Collection を導入しているのので、その場で使い方を高校生に説明してもらった。レファレンスも今までと違ったやり方になる。ジャパンナレッジやディスカバリーサービスなど、市の公共図書館でも始まってきた。デジタルによる効用は、例えば小説作品をデジタル化してタブレット端末などで見られるというようなイメージにとらわれすぎ

ていたが、もっと今の図書館の業務がすっかり変わる部分もあるのではないか。

平賀

地図と写真、防災マップなど思いもしなかったものを、関連付けて見せることができる。専門家にとっても利はある。フラットタッチパネルを囲む人々の姿というのは、今まではなかった。

中村

デジタルだからこそ、裾野広く情報発信できる。見せ方のレパートリーが増える。

編集も電子版ならではのものがあるのではないか。デジタルコンテンツの編集者はまだ少ない。そこが今後の課題。デジタルだからこそその見せ方が増えていく。フラットタッチパネルで見ると言うことも発想はアナログだが、デジタル化資料のアウトプット先が見える形になったもの。

平賀

大画面のタッチパネルで新聞のアーカイブを映したことがある。高校生が見に来て、おじさんと紙面をめくりながら会話が生まれていた。

湯浅

立命館大学にも海外新聞の電子版の LibraryPress が提供され、リアルタイムで読める。紙面の中での記事の取り扱いの大きさがわかる。

見せ方が重要。札幌市の図書館で、電子黒板でデジタル絵本を見せる、ということがあった。弱視の子どもたちも読める。児童サービスの中で、読み聞かせに向いている本、向いていない本があるが、それも電子黒板によって変わると思った。自動音声の方が、子どもたちの反応がいい場合もある。見せ方が違うからこそ新たな可能性が広がる。実際にやってみて気付いていく。

山崎

デジタルの大きなパネルを持っていなければ印刷すればいい。秋田県立図書館でも大きな絵図をデジタル化したが、実物大をパネルにして床に敷き詰め、その上を歩けるようにした。アナログからデジタル、デ

デジタルからアナログというのが有効だと思う。デジタルだからこそいろいろな事ができる。

平賀

是非1階の地図の上を歩いていただきたい。知りたいという発見の糸口になればいい。

湯浅

岐阜県立図書館でもその資料を使って「ぶらタモリ」が作った巨大地図を図書館で公開した。フロアが地図になっているのはすごくいい。



平賀

デジタルだからこそできる。活用の方法はいくらでもある。そのためにも我々はオープンに使える形で情報を蓄えなければいけないと思う。

最後に地域ということで、デジタルの取り組みでも地域に着目すると何がいいのかご意見を。

湯浅

たとえば、立命館大学はデジタルヒューマニティーズという学問の拠点である。京都の古地図をデジタル化し町屋再生など地域活性化につながる活動をしている。

いろんなやり方で、図書館だけでは難しくても連携してできる。

平出

市町村を知るには市町村誌が一番最適だと思う。長野県でも市町村史誌の目次のデジタル化はされているが、是非全県の中で

市町村誌をデジタル化のご尽力をお願いしたい。

平賀

ありがとうございます。実は目次のデジタル化より全文をテキスト化したかった。図書館でやることは簡単なことではないが、やりたいと思っている。地域アーカイブなくしてナショナルアーカイブは成り得ない。

山崎

国のデジタルアーカイブにもかかわっているが、地域の図書館が持っているものはたくさんある。

デジタル化を進めるうえでは、地域の図書館を組み込まなければならない。情報を集めることも、活用するのも国がいくらやろうとしても、一番は地域、身近な図書館で公開、活用してこそ意味がある。使うには身近な存在が必要。人と人をつなぐこともそこにある。

地域の一つの冊子、ちらしでもいい。独自のもの小さなものから始めていくことに価値がある

平賀

時間となりましたが、今回の研修の中でも非常にコアな部分だったかと思います。6名の講師の皆さんに拍手を。